

## 生産力論におけるスミスとマルクス

Smith and Marx in the Theory of the Productive Powers

星野彰男（関東学院大・名） Akio HOSHINO

（要旨）（1）スミス生産力論は的確には理解されずにきた。そこでマルクスのそれと対比しつつ、論点を整理したい。スミス理論のうち地代論は混乱視されたが、中期マルクスは「草稿」途中で絶対地代に着眼し、その混乱を解決した。しかし同「草稿」の大幅な改編公刊等の不運がこのマルクス古典派批判の大転回を見失わせた。（2）スミスは「法学講義」以来、競争により製品安価を可能にする労働能力の度合増進（価値増）→生産量増加という後者優越の両面増加を唱え、これを「労働生産力の増進」と言った。これに対して（リカード→）中期マルクスは価値不変→使用価値生産力説を採り、それを方法→「導きの糸」とした。先の大転回後の後期マルクスも中期と同じ生産力説に終始し、それと同一視したスミス生産力一面化を遂に大転回させるに至らず、スミス本来の内生的生産力説は死角に隠された。後期マルクス理論はその内生的生産力説を捨象した外生的生産力→静態的「資本一般」論であり、動態的「競争」論等を後の「プラン」に回した。またスミス動態論は適度な商業による生産奨励→価値生産の増加を捉えたが、マルクス静態論は商業を単に空費と捉えたにとどまる。（3）スミスの内生的生産力説は労働能力の度合増進を主題とし、それは「ある国で年々に」（要旨）という経験論によるが、マルクスの方法はその度合論を量論に埋没させた。しかし動態は静態を包摂する。従来<sup>つ</sup>の混迷はスミス生産力説をマルクスのそれと同一視したことにある。

### 1. マルクス説の大転回

私は『国富論』（WN,1776）体系をめぐる通説が妥当でないことを検証してきたが（星野2002他）、「生産力」論については未決着である<sup>1)</sup>。通説が典拠にしたマルクス説によれば、WNの労働価値説は、①役畜や肥沃度を地代価値形成に含め、破綻している、②構成価値説（V+Mのドグマ）を並存させ、矛盾している、とされた。①はリカード（1817）に由来する。マルクスはリカードを「古典派の完成者」と呼び（『経済学批判』1859、岩波文庫,71）、「1861-63年草稿5」の前段（『剰余価値学説史』I,1905）までは①②両説を採っていた。しかし同「草稿」中段（前掲書II）で「絶対地代」に着眼し、これを欠くりカード説に対してスミス説を次のように評した（マルクスのこれ以前を中期、これ以降を後期とする）。

「スミスは利潤と地代を…労働者が労働対象に付加する剰余価値から生ずるものとして理解している。」「（リカードでは）剰余価値の源泉と性質が明確には掴ま<sup>つか</sup>れていない…。これに反して…スミスは正しい定式を述べていた。」（*Werke*,Bd.26 II,146, 408 /前掲書II, 大月書店,189, 545-46）

これらは①に反している。後期マルクスはリカード理論が相対的剰余価値説のため、（スミスにある）「絶対地代」の理解不能に陥ったと批判して、先のリカード「完成」説を暗に

撤回した。しかし前掲書カウツキー版Ⅱ（1909）はその撤回趣旨を弱める方向に大幅に改編（一部省略）したため、その趣旨を捉えにくくさせ、リカード「完成」説等の中期マルクス説を全面的に正当化させる不運な結果をもたらした（R.ルクセンブルグ 1913→舞出 1923）。この改編は半世紀後の新版で復元され、スミス絶対地代論の存立も認められた（大内 1976）。この他に貨幣論も含め、後期マルクスは古典派批判を大転回させたが、通説はこの大転回を見失ってきた<sup>2)</sup>。私見はこの不運な事態の論点整理を試み、そこに残された最重要論点が「生産力」論である（星野 2018, 同 2019）。

## 2. 生産力論におけるスミスとマルクス

スミスの「労働の生産諸力」は「熟練、技量、判断力」と不可分である。それらは「分業の効果」であり、後者はいずれも労働能力＝「才能 (talent)」だから、その働きの度合に応じて各能力価値（時間）に換算される。しかも各能力は「改良され、増進する」ため、その生産物の価値も増加し、それに等しい他人の労働生産物の価値を「支配・購買」できる。動物も労働するが、分業＝交換できない。しかし人間は分業＝交換によって交換者双方の能力を向上させ、その長年の累積の結果、未開・文明間では「才能」の伸長（試算で約 1 万倍、星野 2018, 4.2）、およびそれをはるかに上回る物的富裕化を実現したと言う。中期マルクス（1859）はそこでのスミス貨幣論が不十分だと批判したが（後に補正）、「才能」伸長論には触れずに、その帰結を「人間労働」として継承した。これは動態・静態という方法の相違であって、優劣の問題ではあるまい。ただし動態は静態を包含する。

通常、「生産性」（ミル 1848）向上とは、何かの工夫により製品単価を切り下げ、それを補って余りある総販売額の増加により収益を上げ、その結果として賃金も上昇すると言われる。スミスはその原因を分業・機械化等の工夫、つまり「熟練、技量、判断力の改良」に認め、それが「労働生産力を増進」させると捉えた。この視点は「法学講義」に由来し、「国富論草稿」（1762 頃、1935 発掘）では数値例を踏まえて次のように集約した。

「労働の価格が高いことは…公共的富裕が本来そこにあるもの自体と考えられるべきである。…この労働は大変な (great) 熟練と判断力をもって適用されるために…報酬の優越をはるかに上回る割合の大きな効果を上げ、大量の仕事をする。したがって労働はそれだけ高価になり、製品はそれだけ安くなるだろう。」（LJ, 1978, 567 / 『法学講義』附録, 岩波文庫, 454-55）

これはヒューム（1752）の「勤労の増進」→貨幣増加への暗黙の応答であり、冒頭文の「公共的富裕」はマクロ的な価値増加を意味する。ここでは「大変な熟練と判断力」（価値増）が原因となって、その「報酬の優越をはるかに上回る割合の…大量の仕事」（使用価値増）を実現する。つまり、労働能力主体の質的改良→その増進率を上回る物的客体の量的増産率→「製品安価」である。ここに「生産力」・「価値」の両語の内容を先取りし、WN で内発的に両語を使い始め、「生産力」は史上初である。WN I viii 末尾は、「機械」による「労働生産力の増進」における賃金上昇と商品「価値」低下の両立を説いた。そこに事実上含まれる「価値の増加」をマクロ的な第Ⅱ編で次のように明記する。

「年々の生産物の価値を増加させるには…生産的労働者の数を増すか、…労働者の生産力 (productive powers) を増す以外の方法は無い。」(WNII iii 32 パラ)

この後段は WN I i を受けた WN の基本主題である。「労働者の生産力の増進」は「同数労働者」による「公共的富裕」の実現、すなわち価値と生産物(使用価値)の両面での後者「優越」の不均等「増加」を意味する(以下、内生的生産力<sup>3)</sup>)。また WN I 冒頭(i~v)は「生産力」と他商品への支配・購買「力」の度合(degree) = 「価値」とを関連させて使った。「異なる諸対象の諸力を結合できる人」が「哲学者」だとも言う。しかし通説はこの内生的「生産力」の内容より言語の共通性に依拠して、その語を中期マルクス(1859 序言)の「物質的(materiell)生産力」(唯物史観)と同一視し、この内容を「物質」(使用価値)の増産に限定して、「価値増加」を除外した<sup>4)</sup>。これを疑問視した高島(1949→1995)は、「生産力」構成に価値の論理も含まれると提言したが、公式的見地から反発を受けただけである<sup>5)</sup>。ただし『経済学批判』は次のように言う。

「もし商品の生産に必要な労働量が不変のままであるならば、その商品の交換価値は変わらないだろう。だが生産の難易は絶えず変わる。労働の生産力が増進すれば、労働はより短い時間で同じ使用価値を生産する。」(1924, 14 /岩波文庫,36)

この「労働の生産力」は『資本論』(冒頭章 1 節)でも同様であり、一仮定により「商品の交換価値は不変」を前提→価値生産力を捨象(省略)し、「生産の難易」の変化だけで「生産力が増進する」と言う。これは新古典派の「与件」と同様に技術革新を理論的に探究しないまま、「生産力増進」の原因を何か外生的なものに依拠させる方法→モデルである。これに対してスミスの方法→モデルは、その原因を「判断力」等の労働能力の「度合」に絞り込む内生的な方法である。元来、スミスの「同感」能力も他者の類似の「能力(faculty)」の度合を判断する尺度であった(TMSI i 3,10 パラ)。なぜ中期マルクスはこのスミスの方法を見捨てたのか? その理由の一つは、リカード「完成」説を採り、そのリカードは「生産力」が「価値を増加させない」という方法に立脚していたからである。もう一つは中期マルクス以来の「プラン」における冒頭「資本一般」の静態的方法に自己限定したからである。中期マルクス(1859)はそれらの観点から WN 体系をも「使用価値」生産力説に一面化し(前掲文庫,35,67)、それを自らの方法 = 「導きの糸」として先の引用文を提起した。ここにスミス「生産力」論へのマルクスの対応を問うべき所以がある。

後期マルクスは古典派批判を大転回させたのだから、先の WN 価値論破綻説(①)に基づくスミス生産力一面化説をも大転回させて然るべきだった。WN の内生的生産力説によれば、価値と使用価値は一体のもので、労働能力(価値)の度合増進なくして使用価値増産もありえない<sup>6)</sup>。この方がマルクスの見える。しかし後期マルクスは『資本論』でも引き続き「価値不変」の静態的方法を採り、価値増加を含むスミスの内生的生産力説を遂に組上に載せず、結局、先の一面化説を大転回させずじまいに終わった。これの絶大な影響力もあって、本来のスミス説は死角に隠されてしまった。ただし前節①に固執した通説には内生的生産力説に向き合う術が無かったのに対して、後期マルクスはそれを捨象しただけ

という次元の相違がある。これに関わるマルクスの希少な論及は次の通りである。

「労働諸手段は人間労働力の発達の測定器である…。」「社会的平均労働に比べてより高度な、より複雑な労働は…より高い価値を持つ労働力の発揮である。…それゆえに同じ時間内で比較的高い価値に対象化される。…／他方では…より高度な労働はつねに社会的平均労働に…還元されなければならない。…労働者は単純な (einfach) 社会的平均労働を行うと仮定することによって、余計な操作が省かれ、分析が単純化される。」(Werke, Bd.23, 195, 211-13 / 『資本論』2, 新日本出版社, 307, 337-39) 「強度の高い国民的労働は、強度の低いそれに比べて…より多くの価値を生産する。」(Werke, Bd.23, 584 / 同4, 959)

ここに価値増加が論及された。しかしそれは価値と使用価値の均等な増産例(ミル 1848, III 14.3) のようだから、自らの不均等な使用価値生産力(相対的剰余価値論)とは噛み合わない。その結果、マルクスは労働の「単純か複雑か」を「価値増殖過程にとってはどうでもよいこと」で、「単純…と仮定することによって、余計な操作が省かれる」と言う。こうして個別的な労働能力伸長の差異をすべて「平均」化→「単純」化し、生産力増進に内包される競争的な価値増加論を捨象した(新村 2003 への回答)<sup>7)</sup>。

マルクス静態論の難点はとくに商業労働論(交通を含む)に表面化する。ヒューム(1752)は「商業が勤労を増進させる」と言った。これを継承したスミスは、生産者だけの社会より彼らの一部が商人になる社会の方が、分業効果の他に諸備蓄を生産資本に回し(供給)、遠方と取引できる(需要)から、商業経費の負担を補って余りあるほど同社会の価値生産を増加させると言う。これにより同社会一人当たり価値生産が増加するから、その商業労働は生産者の価値生産を「奨励し(encourage)」, それに「間接的に寄与する」と捉えた(WN II v 6-10 パラ, 星野 2002, 5.2)。また商業への最適な資本・労働の配分を需要→「見えざる手」(自由競争)に任せ、そこへの重商主義の介入(植民地貿易の一国独占等)は商業投資を過剰化させて、その国の価値生産を損なうと批判した。「価値不変」のマルクス理論はこの場合もそのスミス説を捨象し、商業経費を単なる「空費」と規定しただけで、商業による価値促進効果をその「空費」節減にしか認めない。こうして、商業が果たす価値生産増への「奨励、寄与」の役割とそれを逸脱した重商主義批判等のスミス説を捉え損ねていた。このようにスミス動態論を捨象し、「価値不変」の静態論としたところに、中期マルクスの「プラン」→「資本一般」論としての限界があり、ここに両者の生産力論の相違が端的に現われた(『資本論』第2部6章, 第3部4篇, 宮崎 1970, 299)。

### 3. むすび

スミスの分業→機械化の「労働生産力」論は、経験的観察により価値生産と使用価値生産が連動する「複合体」(高島 1949, 同 1986)として展開されていた。しかしリカードはその連動論を退け、使用価値生産だけを有効と解し、中期マルクスもそれを踏襲した。後期マルクスの「資本一般」論はその連動論を方法的に回避し、価値生産力と切断した使用価値生産力説としての過渡的な静態分析にとどめた。通説と異なり、①説を却下した後期

マルクスも中期の方法的立場を変えず、古典派批判の大転回に徹しきれなかった。本来のスミス説は「労働生産力の増進」に伴う両価値間の不均等増加を媒介的に把握した上で、諸個人、諸企業間の競争も含め、それら「度合」の調整を「見えざる手」に委ねた。マルクスは先の「プラン」冒頭の未だ抽象的な「資本一般」論の達成に生涯を懸けたため、後の「競争」、「賃労働」等において本来のスミス説に取り組む含みを残したにとどまる<sup>8)</sup>。

一般に「原因」論には、ゼロ・ベースの「そもそも」論と「ある国で年々に」という経験論がある。「生産力」について、前者は〔1〕労働量の増加→外生的生産力（静態）になるが、後者は〔2〕労働の度合増進+〔1〕→内生的生産力（動態）になる。前者はマルクスの方法、後者はスミスの方法である。両者とも「生産力」論の主題を〔1〕に認めたが、とくにスミスは文明社会での「年々」の〔2〕の増進を主題とした<sup>9)</sup>。マルクスは「労働力の価値」と「剰余価値」を区別し、個別労働能力の度合増進を不断に「社会的平均労働」に還元し、それを「単純と仮定」して、方法的に〔2〕の増進を捨象した。スミスは賃金労働者の富裕化を「衡平 (equity)」の原則に合致するとみなし、〔2〕労働能力の度合増進→その価値増加（賃金上昇）→付加価値増加を理論化した。マルクスは資本の下での労働力→生産物価値が「不変」のままの「剰余価値」の資本化「分析」に基づき、階級「矛盾」の解明を主題とし、古典派の分配改良論と峻別した。しかしその後続「プラン」で内生的生産力説を織り込まない限り、それは完結しえないのではないか？<sup>10)</sup>

内生的「生産力」論の動態的（「才能」）視点は環境保護からも再評価されうる。これに対して静態的（量的）視点は主流派経済学とともに環境問題にいかに対応できるのか？ 静態（部分）は動態（全体）の一部だから、静態論は動態論（市民社会）に包摂される関係にある。マルクスの「経済学批判」体系のうち、こと「生産力」に関する限り、WN体系の競争的な内生的生産力を一面化して継承し、その本來說を克服する課題は後の「競争」論、「賃労働」論等の「プラン」に託された。ところが、通説は既存のマルクス説〔1〕にスミス説〔2〕+〔1〕を同一化させるという転倒を冒していた。ここにスミス「生産力」解釈の混迷を引き起こした固有の事情があり、これを克服せずにはスミス市民社会論も十全とは言えない。このことは学説史上のすべてのスミス論にも当てはまる。

#### （注）

- 1) 本報告は新村（2019）、佐藤（2019）による星野（2018）評への回答を含む。
- 2) 羽鳥（1974→1990）はその新版 I にマルクスの WN 引用ミスを見出し、②を退けた。
- 3) この引用文の後続個所で「機械改良」等のための「追加資本の必要」が説かれる。これは先の「国富論草稿」の引用文のように、主としてその「改良」に必要な「判断力」（労働能力価値）の増進→賃金上昇のためであり、その増進が付加価値増加と製品安価を実現すると暗に語っている（WNV xi 35 パラ）。またその直後の文脈では、数世紀来の英国で度重なる戦争等により生産的労働者の雇用が大いに妨げられてきたにもかかわらず、「資本蓄積」が健康体のように成長してきたのは国民の「努力」（節約と勤労）のお蔭だと言って、内生的生産力説を消去法的に論証している（星野 2019）。

4) labour, power には主体的ニュアンスもあるが, Arbeit, Kraft には客体的な含意も強い。両者間の「労働の生産力」の齟齬はここにも起因しよう。

5) 『資本論』(1867,冒頭章1節,第2章他)は労働の「対象化」を「物質化(Materialisieren)」と言うから,その「物質的生产力」には価値生産も含めたはずだ。ただしマルクスは,「生産的労働は…労働能力を直接に生産し,形成し,発展させ,維持…する労働であろう。」(前掲『剰余価値学説史』I,大月書店,187)とも言うから,「物質的」に限られない。高島はスミスとともに価値の「物質化」とは言わない。「生産力は,…主体である人間の力能…が技能や技術や科学など…をその内に含んでいると考えられる…。」(高島 1983) ポストン(1993)は唯物史観の狭隘性(価値不変)に対して同様の疑問を提起した。なお,高島説も前節の①を採ったため価値増加論に触れず,そのことが折角の問題提起を抽象化・狭隘化し,理解され難くしていた。

6) WN では農産物形成論は多元的だが,自然条件は長期的には不変だから,「年々」の増産(価値形成)は「生産的労働」に一元化された(星野 2018, 6.3)。

7) 先のミル視点はマーシャル(1876)に継承された。その動態論にスミスとの接点がありうる。

8) 宮崎(1970, 135-55 [初出 1953], 293-94)はこの「プラン」問題の中の「資本一般」と「競争」の対比を重視し,それらを静態論と動態論の対比として捉えようとした。ただし「生産力」論との関わりについては言及していない。

9) スミスの〔1〕は生産的労働者数の量的「割合」増に限られる(WN序論)。

10) スミスにとって〔2〕「度合」(→カント「質」)と〔1〕「量」は対等な関係だが,ヘーゲル(1812-16)→マルクスの「度合」は「量」概念に含まれた下位概念である(星野 2018, 3.3)。またスミスの経験的方法には「そもそも」論(ヘーゲル→マルクス)と異なる独自性もあろう。カント(1781)はヒュームの懐疑的な方法によって,「そもそも」論の難点(アンチノミー)に気づいた(「独断のまどろみ」から目覚めさせられた)と言われる(石川 1995, 39-48)。同様にヒューム視点を<sup>く</sup>潜り抜けたスミス視点は,この論点に関する限り5年後のこのカント説を先取りしていたと思われる。

(主な参考文献) \*星野(2018)と重複する参考文献を省略

Hegel, G.W.F. 1812-16. *Wissenschaft der Logik*

Marshall, A. 1876. On Mr. Mill's Theory of Value, *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A.C.Pigue. London 1925.

宮崎犀一 1970. 『経済原論の方法』上, 未来社

高島善哉 1983. 「生産力の理論とは何か」, 『経済学史学会年報』21号

——1986. 『時代に挑む社会科学』岩波書店(『高島善哉著作集』こぶし書房, 第9巻)

石川文康 1995. 『カント入門』筑摩書房

新村聡 2019(3月). (研究ノート)「アダム・スミスにおける生産力と価値——星野彰男『アダム・スミスの動態理論』(2018)によせて」, 『岡山大学経済学会雑誌』50-3号

佐藤滋正 2019(7月). 「星野(2018)書評」, 『経済学史研究』61-1号

星野彰男 2019(7月). 「スミス経済理論体系の完結性」, 『経済系』277集